高齢者が主体的に生きる意味を考える

－在宅高齢者へのインタビューを通して－

○　四天王寺大学　　畑　智惠美（2946）

笠原　幸子（四天王寺大学・2556）

キーワード：高齢者　主体性　自己決定

１．研 究 目 的

何らかの支援が必要となった高齢者が、自分の思いを大切にして自分らしく生ききることができるような支援は、地域包括ケアシステムの構築が声高に謳われる中、ますますその重要性を増してきていると考えることができる。すなわち「高齢者が主体的に生きる」ためには、医療ニーズや生活ニーズを満たすだけではなく、高齢者の心理面を尊重したケアの在り方を検討していくことが求められている。

心理面を尊重したケアの在り方を明らかとするためには、「高齢者が、自分の生活において主体的に考え、物事を決めているさま」を注意深く読み取ることが必要となる。本研究は、高齢者の心理面を尊重した支援を考えていくうえでの第一歩として、在宅生活を主体的に営んでいる高齢者の方々の語りを分析することを通して、その手がかりを得ることを目的とする。

２．研究の視点および方法

高齢者が、自分のこれまでの人生をどのように捉え、今をどのように過ごしているか、そして、自分の今後をどのように考えているかなどを自由に語っていただくことを通して、「自己決定をしながら主体的に生きる」意味を探ることに焦点を当てた。具体的には、Ａ市内の居宅介護支援事業者の管理者に研究の趣旨を説明したうえで、利用者の紹介を依頼した。そして、紹介された高齢者宅を担当の介護支援専門員に同行して訪問し、介護支援専門員同席のもと、研究者がインタビューアーとして、高齢者に問いかける形で語っていただいた内容をＩＣレコーダーに録音した。インタビュー時間は、１時間程度である。その録音データの逐語録を用いて、内容分析をおこなった。

３．倫理的配慮

インタビューをおこなうに当たっては、研究の目的、ＩＣレコーダーに録音すること、協力することによる不利益がないこと、プライバシーを守り匿名性を確保すること、研究発表をおこなうことなどを説明し、書面としての同意書をいただいた。また、インタビューデータのテープ起こしに当たっては、依頼業者と守秘義務契約書を取り交わした。なお、本研究計画は、四天王寺大学研究倫理審査委員会の審査を受け、承認を得た。

４．研 究 結 果

在宅サービスを活用しながら、自分らしさを大切に生活されている以下の４名の高齢者

からインタビュー調査に協力をいただくことができた。

	性別	年齢	介護度	生活における主体的な活動など
Ａ氏	女性	76 歳	要支援２	近くのプールへ通い、プール仲間と交流
Ｂ氏	女性	77 歳	要支援１	おはなしの会ボランティアとして活動
Ｃ氏	女性	87 歳	要支援２	昔からの友人が多く、毎日、複数の友人の訪問がある
Ｄ氏	女性	89 歳	要支援１	句会に入っており、俳句を詠むのが日課

介護支援専門員からのインタビューを承諾された高齢者は、人とのかかわりを前向きに捉えられていると推測できる。インタビューに際しても、快く自宅に迎え入れていただき、インタビューアーのことを気遣っていただける場面も多かった。そして身の回りには、高齢者ご自身にとって大切な写真や品物が配置されており、その人らしさを感じ取れる居心地のよい空間となっていたのが印象的であった。また、Ａさんは夫のサポートのもと安定した生活を営まれている。Ｂ，Ｃ，Ｄさんはいずれも夫を看取っており、その見取りの体験が今の生き方に大きく影響していることもうかがわれた。

語りの中から抽出されたカテゴリーは、《自分の健康との向き合い方》《これまでのつながりを大切に自分らしさを楽しむ》《これまでの人生でがんばってきたことへの自負》《これからの人生のすごし方への自然体の姿勢》《最後まで自分らしく生ききる覚悟》である。

５．考 察

調査対象者の語りから、高齢者はこれまで生きてきたプライド＜価値観＞のうえに、今の自分の体力や健康面を客観的に受け入れながら、人生のしまい方＜肯定的な未来志向＞を想定していた。また、大変だった経験も含めて、さまざまな人とのかかわりが「運がよかった」などと人生を肯定的＜幸福感＞に捉えられていた。今を楽しみ、できることに向き合って今を精一杯すごすこと＜コーピング力＞が高齢者自身にとって自然であり、また、そのような姿勢が、「助けてもらえるところは助けてもらう」と割り切ることができている点からも推測できる。

「自己決定をして主体的に生きる」ことは、意識することなく私たちの日々の生活の営みの中で繰り返しおこなわれていることだともいえる。しかし、他者からの支援の必要性が出てくると、要支援者対支援者というような関係性が生まれ、その当たり前の営みは、意図的に潜在化される傾向がある。支援者が高齢者の心理面を尊重し支援していくためには、高齢者の人生と向き合う覚悟が必要であり、信頼関係の構築をベースに、ストレングス視点を内包したアセスメントによって高齢者をエンパワメントしていけるようなかかわりが求められるのではないかと考える。

なお、本研究は、科学研究費助成事業・基盤研究Ｃ・15K04020 の一部として行ったものである。